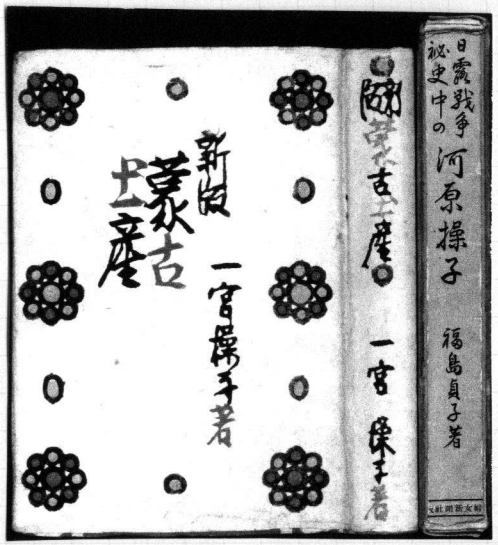
一宮操子（みやみさお）　女子教育家。明治八年六月六日長野縣生れ、昭和二十年三月七日歿（一八七五―一九四五）。舊松本藩儒河原忠の一女。長野縣師範學校女子部を了へ東京女子高等師範學校に入るも、病を獲て中退。歸郷して長野高等女學校に教鞭を執る。明治三十三年横濱の大同學校女子部新設に當り、下田歌子の薦によりその教職に就き、更に上海に渡つて務本女學堂の經營に與つた。三十六年内蒙古の喀喇沁（カラチン）王府の招聘を受け、教育顧問として王府内に孰正女學堂を創設。時に日露開戰前夜に當り、軍部の内命を受け、先王まで親露の王家を親日に導き、ロシア軍の動勢を探つて通報する國家的任務を負ひ、翌年には横川省三、沖禎介等特別任務班の手引をするなど活躍し、戰後叙勲（勲六等寶冠章）。歸國後正金銀行取締役一宮鈴太郎と結婚。のち滿洲國建國十周年記念事業の一として河原操子女史顯彰會が設けられた。

著書に『小萩集』（河原操子名、下田歌子・中島孤島・西本愛陰合著、明治三十九年十月）、『十八日帝國婦人協會出版部）、『蒙古土産』（明治四十二年十一月四日實業之日本社）、『新版蒙古土産』（「人蒙當時の回顧」等增補の他、保田與重郎編「河原操子」附載。昭和十九年一月）、『十日清文社）、『カラチン王妃と私―モンゴル民族の心に生きた女性教師』（河原操子名、昭和四十四年四月）、『日露戰爭秘史中の河原操子』（福島貞子著『日露戰爭秘史中の河原操子』（操



子舊稿「旅日記八篇」附載。昭和十年一月一日婦女新聞社）、赤沼三郎著『カラチン抄』（昭和十八年十一月十日博文館）がある。